

研究通信

No. 19

1956年5月刊

村落社会研究会
編集部

丁平片市台仙
教育大学
内室研究部東

共同研究の前進のために

(金沢) 井森睦平

編者から寄稿を帯められたが、特に書くこともないので、農村の社会学的研究の上で近頃頭に浮んでいるりとめのない断想の一端を記してみる。

近年社会心理学で人格や性格の研究上、従来のように多数の性格の種別をそのまま扱わず、これを等質的なりの基本的因子に還元しようとする試みがなされ、かおいても、少くとも部落といつた基本的なものについては、その構造・意識にわたり今までとりあげられていた多種多様な移し教の事項が、若干の統一的な因子に分解され得ないかと考える。どういふものが見出されたならば東北の村であれ、九州の村であれ、また山村たると郊村たるとを問わず、共通の尺度基準から個々の村や村落を比較することも可能容易になり、一般化の点において農

村社会学の理論を一步前進せしめるに役立つ所が少くないと思う。

構造については、今までに調査蒐集されているあらゆる部落関係の慣行・習俗・行事などの資料、意識については全国的に実施する対部落態度調査の結果に対して、質的(例えば尺度分析など)、量的(例えば因子分析など)の統計的処理分析を加えるなどの方法によつてある程度の成果が得られるのではないかと思う。結果の一般的妥当性を望むならば、どうしても全国的規模でやらねばならないので、到底一人の力及ぶ所ではなく、共同研究に俟たねばならないであろう。

家族の研究と並んで、農村研究は我が国社会学の中では比較的進んだ分野といわれるが、しかしたとえその成果には学問的意義はあるとしても、農村農民の生活にどれ程役立つというかということになると、甚だ難わしいといわざるを得ない。以前はともかくとしても、今日のように社会学を専攻し、これを職業とする人が多くなると、どの研究分野にあつても、単に学問のための学問、調査のための調査といつたことではすまされぬ。何らかの意味で、社会の要望に答える所がなければならぬように思う。いかなる面において、またいかなる研究を通じて農村農民の生活に寄与すべきかということが問題になつてくるが、これについては隣接の農業経済学・経営学などから教えられる所があるのではないかと思うが、どうであるらうか。